高齢者の生活実態と主観的幸福感
The daily living situations and subjective feeling of happiness in the elderly people

1K10C462-6　譲原　里菜
主査 内田直 先生　　副査 岡浩一朗 先生

【背景】

現在、我が国の高齢者人口は 3186 万人、総人口に占める割合は 25.0%と過去最高（2013 年 9 月 15 日現在）となった。この数値は、前年の 3074 万人、24.1%と比べると、112 万人増、0.9 ポイント増と大きく伸びていて、今後もあと約 50 年は高齢化率が上昇を続ける見通しだ。このように既に我が国は列記とした「超高齢社会」であるが、そんな中、高齢者単身世帯及び高齢夫婦世帯の増加と、それに伴い、高齢者の孤立化・孤立死が近年社会問題となっている。

このような問題のもと、本研究では、高齢者にとっての余生をよりよく生きがいのあるものにするために資することを大目的とする。高齢者の生活、それを支援する地域コミュニケーションという視点から、高齢者の QOL について考える必要性を感じた。つまり本研究の目的は、高齢者の環境（家族や地域コミュニケーション）との関わり方と、他の生活実態、さらに実際に高齢者自身が感じている、主観的幸福観との関係を明らかにすることにある。

【方法】

埼玉県朝霞市と新座市を中心に、地域に暮らす 65 歳以上の高齢者 77 名（男性 26 名、女性 45 名）にアンケート調査を実施した。アンケートには、筆者が作成した①性別、②年齢区分、③居住形態、④健康状態、⑤会話の頻度、⑥頼りにできる人の数、の 6 項目から成る生活実態に関する調査用紙と、主観的幸福感を測るものとして改訂版 PGC モラールスケールを使用した。モラールスケールの評価尺度には、一般的に「はい」・「いいえ」もしくはそれに応じた択一方法がとられる。しかし本研究では、評価尺度に VAS（Visual Analogue Scale）を用いることで、これまで見逃されていた高齢者の微妙な感情の程度に目を向けることも試みた。

【結果】

本研究においては結果として、

①「居住形態」と「健康状態」の関連において、「配偶者と二人暮らし」×「配偶者を含めない家族複数人と同居」と「一人暮らし」×「配偶者を含めない家族複数人と同居」の間に有意差が認められたこと。

②高齢者の主観的幸福感の高さを決めるものが、第一に病気の有無にあるとは限らないこと。

以上 2 点のことが新たに明らかとなった。

【考察】

今回の研究によって、高齢者の幸福感を決める要因として、家族や友人、地域コミュニケーションなどとの繋がりは、高齢者自身の抱える病気などの健康状態に比べ、重要となることが明らかとなった。さらに、結果①より、高齢者の「健康状態」には、配偶者より他家族の支えが大きい可能性があることも考えられる。また、有意差を認めることはできなかったものの、本研究でも先行研究と同様、共に暮らす家族の有無は主観的幸福感の度合いに影響を与え、その家族との関わりが多いほど主観的幸福感は高くなる傾向が見られた。これらのことから、高齢者にとっての余生をよりよく生きがいのあるものとする為には、高齢者自身の能動的努力はもちろんであるが、周囲の支援や積極的な関わりが必要不可欠であることが言える。

本研究の限界と課題としては、基本的属性の比率に偏りがあることから、結果にもその偏りが反映されてしまった可能性が考えられた。そのため、今後は、男女比を合わせること、そして、さらに詳しく調査する為には年齢を区分別に分けることなく、検討を行う必要がある。

また、今回の研究では、先行研究とは異なり、主観的幸福感の測定においてモラールスケールに VAS（Visual Analogue Scale）を用いた。先行研究で指摘されていた有意性を、本研究では認めることができなかったものがいくつかあることについても、それが VAS を用いることによってより正しい結果を導くことができたのか、それとも逆、または他の要因によるものだったのかも、検討を行う必要がある。